

令和元年度筑波大学附属図書館特別展 ～東京 1964 と日本文化について考える～

Special Library Exhibition
- Tokyo 1964 and Japanese Culture -

会期 令和元年11月1日(金)～12月6日(金)
会場 筑波大学附属図書館(中央図書館貴重書展示室)
主催 筑波大学附属図書館／筑波大学体育系

凡 例

1. 本書は「令和元年度筑波大学附属図書館特別展 ～東京 1964 と日本文化について考える～」(会期：令和元年 11 月 1 日(金)～12 月 6 日(金))の図録である。本特別展は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会参画プログラムの一つとして開催される。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。
3. 本書の図版番号は、展示資料の番号と一致するが、展示の順序は必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛する。
4. 掲載資料の標題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 本書は、第 1 部～第 3 部を真田久(体育系教授)、コラム「いだてん 金栗四三のマラソン必勝法」を大林太朗(体育系助教)が執筆し、編集および校正については特別展ワーキンググループが行った。

目次

目次	1
附属図書館長ご挨拶	2
体育系長ご挨拶	3
第1部 東京オリンピック開催まで	4
1. 東京オリンピックの計画	5
2. Tokyo 1940	9
コラム「東京オリンピックと嘉納治五郎」	13
3. 東京オリンピック(1964)開催まで	14
第2部 東京オリンピック開催	21
1. 芸術展示	22
2. 市民文化としてのオリンピック	26
第3部 東京オリンピック開催後	31
コラム「いだてん 金栗四三のマラソン必勝法」	34
近現代オリンピック（夏季大会）年表	36
掲載資料一覧	37

附属図書館長ご挨拶

筑波大学附属図書館では、平成7年度の中央図書館新館竣工の際に、貴重書展示室が設置されてから、学内組織の協力を得つつ、本学が開学以来所蔵する貴重資料などを広く公開する展示事業を行ってきました。

一昨年度は、「江戸の遊び心 -歌川国貞の描く源氏物語の世界-」と題した源氏絵を中心とした展示をし、昨年度は、「グローバルに挑む群像 -幕末から明治へ-」と題して、幕末・維新时期から明治前半期の貴重資料を中心に展示を行うなど、毎年様々なテーマで特別展を開催し、好評を博しています。

今年は、「令和元年度筑波大学附属図書館特別展 ～東京1964と日本文化について考える～」と題して、日本がどのようにオリンピックを受容し実現しようとしていたのか、さらに日本文化との関わりについて、体育系真田久教授の指導のもと、附属図書館と体育系との共催により、本学所蔵のオリンピック関連資料を中心に展示することといたしました。

第1部では、1964年そして2020年の東京オリンピック開催に至るまで、未開催に終わった1940年を含めて、どのように招致活動が展開されたのかについての資料を展示いたします。第2部では、オリンピック開催期間中の芸術展示や雑誌等で紹介された様子を中心に上げています。そして第3部では、オリンピック開催終了後の報告書や写真集などを紹介いたします。各部での展示資料は、附属図書館所蔵資料から厳選した貴重な資料であり、体育系との協力の下で収集した資料も多く含まれます。

附属図書館特別展は、本学に蓄積された豊かな「知」を積極的に内外に向けて発信するという附属図書館の取り組みの一つではありますが、今回の特別展は、「東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の参画プログラム」として行われるものです。貴重書展示室での資料展示に加え、特別展オフィシャルWebサイトから電子展示の公開も行っています。スポーツの祭典、そして文化の祭典としての東京オリンピックが、私たちに問いかけたものは何だったのか。来年の東京2020オリンピック・パラリンピックへの関心の高まりに向け、展示される資料を是非とも多くの方々にご高覧頂き、新たな世界を発見される機会として頂くことを期待いたします。

令和元年11月

附属図書館長 阿部 豊

体育系長ご挨拶

このほど私ども体育系との共催により「令和元年度筑波大学附属図書館特別展～東京1964と日本文化について考える～」が開催される運びとなりました。この特別展は、附属図書館が所蔵する貴重な資料から厳選し、1940年に開催予定であった東京オリンピック、そして1964年のアジアで初開催となった東京オリンピックについて、文化との接点で見えていこうとするものです。

いうまでもなく、明年は東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される年でもあり、筑波大学体育系はスポーツ科学によるアスリート支援、オリンピック教育の全国展開、そして政府のスポーツ・フォー・トゥモロー政策の一貫である人材育成プログラム（TIAS）など多岐に関わっています。そうした中で、オリンピックの教育研究に関わる一つとして、今回の展示が企画されました。

これまでにオリンピック研究に供するため、オリンピック関連の図書資料を附属図書館と体育系で集めてまいりました。幻のオリンピックとなった東京1940大会、アジア初の開催となった東京1964大会については、前身校の東京教育大学から受け継ぎつつも、各IOC委員に嘉納治五郎先生により配布されたアルバムなどの貴重な資料をここ数年、入手してきました。それらは日本や東京をどのように世界にアピールしたのか、さらに、日本の文化を世界にどのようにアピールしたのかを示すとともに、私たちがオリンピックという文化をどのように受け入れてきたのか、を示す貴重なものでもあります。

今回の特別展は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の参画プログラムとして行われるものでもあり、オリンピックの持つ多面的な側面が理解され、明年の東京大会への関心がますます高まることと期待します。

「令和元年度筑波大学附属図書館特別展～東京1964と日本文化について考える～」への多数のご来駕をお待ちしております。

最後になりましたが、本特別展の開催にあたり、ご支援・ご協力をいただきました皆さまに厚くお礼申し上げます。

令和元年11月

体育系長 西保 岳

第1部 東京オリンピック開催まで

Part 1. Before the Tokyo Olympic Games

東京でオリンピックを開催すること、つまり招致活動が成功したのは3回ある。1940年、1964年そして2020年。1940年の東京オリンピックは、残念ながら日中戦争により返上してしまうが、それでも招致成功と大会準備のために様々な努力がなされ、市民にオリンピックとは何かを伝えつつ、世界に対して日本文化を紹介した。

3回のそれぞれの東京オリンピックについて、東京、日本をどのように世界にアピールしたのか。また大会の準備に向けて関係者がどのようなことを行っていたのか、本学附属図書館に所蔵されている資料から紐解いてみると、実は1940年、1964年そして2020年に共通する招致のビジョンが認められる。それは①アジアでの開催による貢献、②災害や戦争からの復興、③おもてなし・ホスピタリティ、④次世代への継承（教育の重視）、ということである。また3回の東京大会に共通して世界に発信したのは、大都市東京の特異性であり、西洋的な近代建築や交通・水道・学校などの都市機能とともに、寺社や緑深い公園など、伝統的な美しさも合わせ持ち、西洋人を飽きさせない、ということであった。2020年の大会開催地を評価する国際オリンピック委員会（IOC）評価委員会による東京評価も、近代性と伝統性が融合した都市という点があげられている。この点は共通しているのである。

1940年、そして1964年の東京でのオリンピック開催は、アジア初の開催であり、それによりオリンピック・ムーブメントがアジアに広がることを訴え、2020年にはアジア・アフリカなど発展途上国においてもスポーツ文化が栄えるよう「スポーツ・フォー・トゥモロー」、つまり100カ国、1000万人以上がスポーツの価値に触れる運動が展開されている。これも同じ地平で考えることができよう。

Japan has had three successful bids for the Olympics Games: Tokyo 1940, 1964 and 2020. Through these Olympics, Japan aimed to express its culture to the world. Tokyo 1940 was finally cancelled because of war, but the Japanese people made efforts to prepare for the Games. What were the visions of these Tokyo Games and what did the public do to incorporate the Olympic Games into their society?

There are common underlying visions in the three bids for the Tokyo Games. One of these is the significance of holding the Games in Asia, the second is reconstruction and recovery from disaster, the third is hospitality, and the fourth is to reinforce and renew the Olympic values for succeeding generations.

Tokyo's appeal is its uniqueness - the harmony of western facilities and traditional nature. Tokyo 1940 and Tokyo 1964 tried to promote the Olympic spirit throughout Asia. Tokyo 2020 has tried to promote the value of sport to the world through the Sport for Tomorrow project, in which the University of Tsukuba is a partner.

1. 東京オリンピックの計画

1. Plan of the Tokyo Olympics



1940年と1964年に東京への招致を目指した際に各国の関係者やIOC委員に配布された写真集（1933年、1935年、1956年）を本学附属図書館は所蔵している。この中には、嘉納治五郎が直々にIOC総会で配布したものも含まれる。前述した東京開催のビジョンとともに、美しい日本、東京の風景とともに、スポーツに熱狂している国民の様子が描かれ、関東大震災や第二次世界大戦から復興してさらに美しく堅固になった都市の姿を示している。さらには日本人の細やかなおもてなしの様子も描かれている。

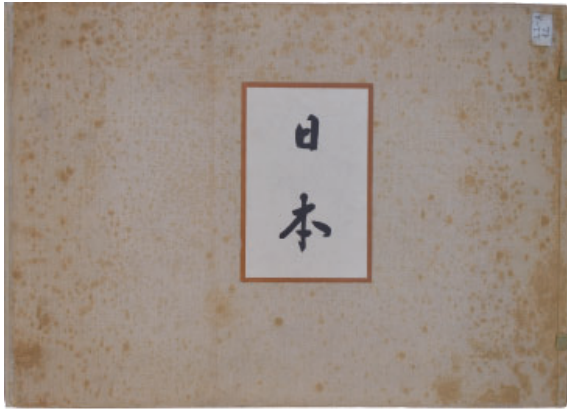
The University of Tsukuba library has valuable photo albums that introduce Tokyo City, Japanese culture and sports from 1933, 1935 and 1956. One of these was presented to other IOC members by Prof. Jigoro Kano. It included pictures of sightseeing spots, sport activities and recovery from the 1923 Great Kanto Earthquake, examples of fine Japanese hospitality and the bid vision.



1 Tokyo : sports center of the Orient

Tokyo : Tokyo Municipal Office, 1933

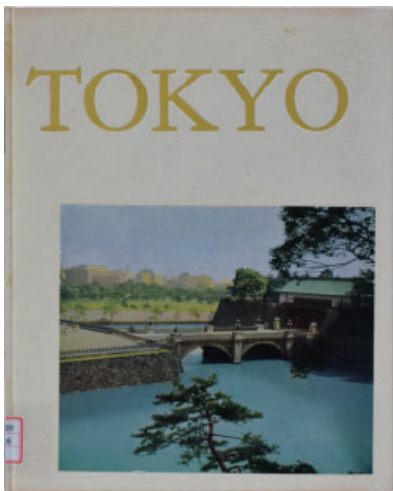
1940年のオリンピック競技大会開催地に東京市（当時）が立候補した際に作成されたアルバム集で、1934年のアテネで開催したIOC総会で配布された。東京市の紹介と立候補する理由について説明されている。アジアでの開催により、オリンピック・ムーブメントが広がること、東京市がニューヨーク、ロンドンに次ぎ世界で3番目に人口の多い都市であり、近代西洋的な施設や体系と伝統的な日本文化とが融合していること、そして関東大震災から復興したことを掲げている。



2 日本

Tokyo Municipal Office, Tokyo : Kawaguchi Printing Works, 1935

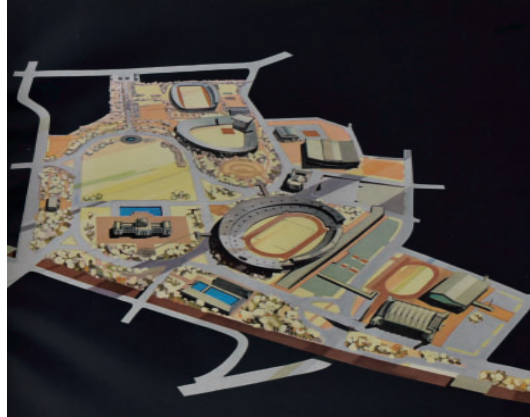
1935年初めに東京市の市設案内所により作成された豪華写真帖。1935年2月にオスロで開催されたIOC総会で、1940年大会の開催地が決定される予定だったので、それに間に合うようにIOC委員や各国オリンピック委員会等に配布された。内容は、東京のみならず、日本全国の景勝地、祭りや歌舞伎などの文化や産業の紹介、スポーツ施設、さらに西洋的おもてなしの様子も紹介されている。美しい内容で好評を博したといわれる。



3 TOKYO

Tokyo : Tokyo Metropolitan Government, 1956

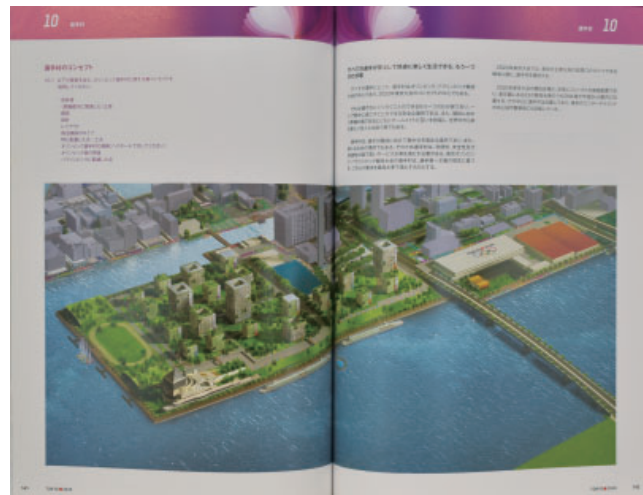
1956年に東京都庁が制作した写真集。前年のIOC総会で、1960年大会の開催地としては東京はローマに敗れたが、本命である1964年大会の招致成功を目指して作成された写真集である。第1部は著名な日本人選手の紹介、第2部は東京のホテル、地下鉄、百貨店、祭りなどの紹介。さらには列車の食堂車における西洋的ホスピタリティの様子も表現されている。



4 1964 to TOKYO

東京オリンピック準備委員会編, Tokyo : Tokyo Metropolitan Government, 1959

1959年にミュンヘンで開催されたIOC総会の直前に作成された写真集。この総会で1964年のオリンピック開催地が東京に決まることから、招致活動最後の写真集である。1958年に竣工した国立競技場や東京体育館など、競技場の紹介がフランス語と英語でなされている。東龍太郎都知事はアジアでの初開催を日本国民が切望していると述べている。



5 東京オリンピック招致委員会 (2012) 立候補ファイル

東京 : 東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会, 2013

2020年のオリンピック競技大会の開催地に立候補した時の立候補ファイル。ビジョンとして次の5項目が掲げられた。

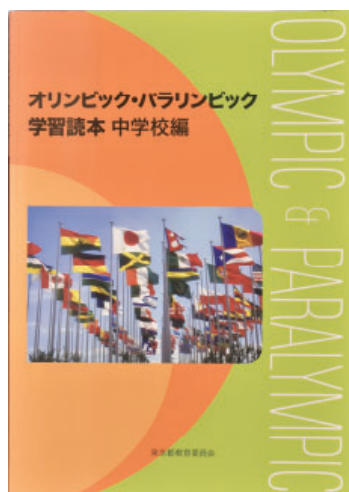
- 1) 日本国内外においてオリンピックに更なる価値をもたらし強化する
- 2) 十分に計画された安全な大会の開催
- 3) 都市の中心で開催されるダイナミックな祭典に世界を歓迎
- 4) 友情と相互理解を促進
- 5) 急速に変化する世界の中であってオリンピズムを保ち続ける



6 オリンピック・パラリンピック学習読本, 小学校編

東京：東京都教育庁指導部指導企画課, 2016

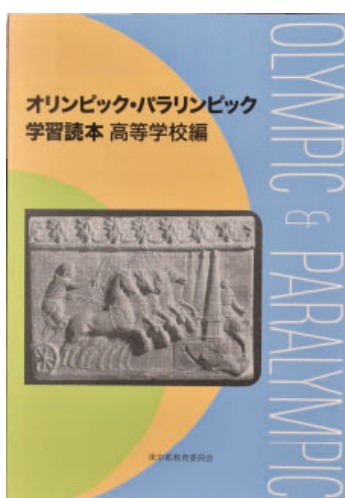
東京都教育庁が編纂した小学生向けのオリンピック・パラリンピック学習読本。2016年3月に発行され、東京都内のすべての小学校の生徒1学年分が全校に配布された。本学体育系真田久教授（東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議座長:当時）が監修に携わった。内容は、オリンピック・パラリンピックの精神、日本における歩み、日本の文化・伝統、2020大会の紹介などである。



7 オリンピック・パラリンピック学習読本, 中学校編

東京：東京都教育庁指導部指導企画課, 2016

東京都教育庁が編纂した中学生向けのオリンピック・パラリンピック学習読本。2016年3月に発行され、東京都内の中学校の生徒1学年分が全校に配布された。内容は、オリンピック・パラリンピックの精神、日本におけるオリンピック・パラリンピックの歩み、日本の技術と日本文化、東京2020大会におけるマナーや交流のあり方について書かれている。



8 オリンピック・パラリンピック学習読本, 高等学校編

東京：東京都教育庁指導部指導企画課, 2016

東京都教育庁が編纂した高校生向けのオリンピック・パラリンピック学習読本。2016年3月に発行され、東京都内の高等学校の生徒1学年分が全校に配布された。内容は、オリピズム（オリンピックと平和、聖火リレー、アンチ・ドーピングなど）、日本におけるオリンピックとパラリンピックの歴史、日本の技術と文化、東京2020大会の目指すもの、などにわたっている。

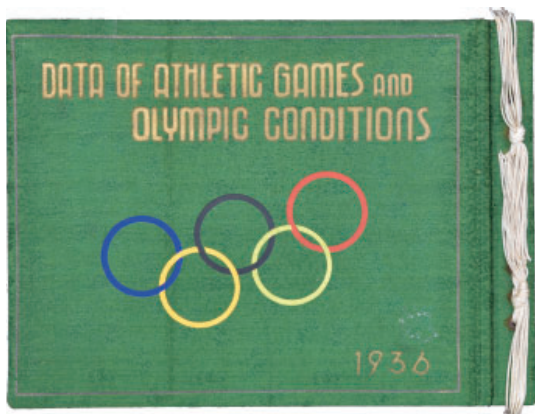
2. Tokyo 1940

2. Tokyo 1940



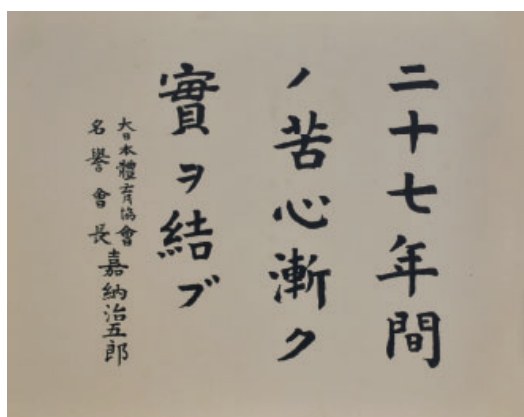
初のオリンピック開催を目指して大日本体育協会などの関係者はオリンピックの紹介に努め、オリンピックの歴史についての本を出版した。1940年の東京オリンピック開催が決まると、日本の文化を紹介するシリーズ本40冊（英語版）が鉄道省国際観光局より発行されている。日本人の国民性、教育制度、家族生活から相撲、柔道、舞踊、温泉に至るまで紹介された。また、オリンピックは金儲けのチャンスとばかりに、そのノウハウを紹介した本も出されている。

The Japan Amateur Athletic Association published some books on the history of the Olympics to educate the Japanese public about the Olympics. After winning the right to hold the Tokyo 1940 Olympics, the Board of Tourist Industry, Japanese Govt. published books on Japanese culture describing Japanese nationality, education system, family life, Sumo, Judo, dance, hot springs and other topics.



9 運動競技資料とオリムピック事情 稲葉言治著, 東京: 東京毎夕新聞社, 1936

1936年のベルリンで開催されたIOC総会にて、1940年の東京オリンピック開催が決定したことにより編纂された、オリンピックについて紹介した資料。鳩山一郎前文部大臣による「明朗快活」および大日本体育協会名誉会長嘉納治五郎による「二十七年間ノ苦心漸ク實ヲ結ブ」の題字が書かれている。内容は、学校体育の価値、職場や家庭での体育、運動と衛生など基本的な理論と各種競技の練習方法、オリンピック競技大会の歴史などについて記されている。

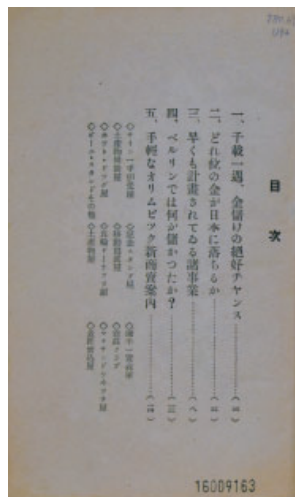
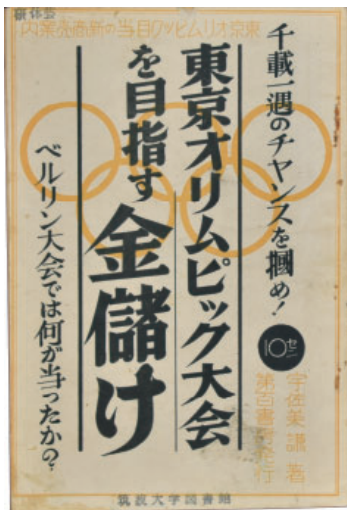




10 オリムピックの書

大日本体育協会編, 東京:三省堂, 1936

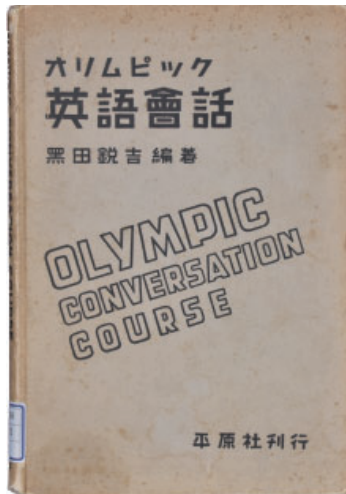
1940年の東京オリンピックの開催が決定したことを受けて書かれた、オリンピックについて紹介した図書。平生^{ひらお} 鈇^{はちさぶろう}三郎文部大臣は挨拶文で、日本国民が確乎不拔の日本国家観念と、光輝ある武士道精神とを理解しなければならぬと述べており、国家主義的な色彩の漂う要素も含まれていた。内容はオリンピックの意義、古代オリンピック史、近代オリンピックの復活、近代オリンピック史、各大会における日本の戦績について書かれている。



11 東京オリンピック大会を目指す金儲け

宇佐美謙著, 東京:第百書房, 1936

1940年の東京オリンピック開催が決定したことを受けて1936年8月に出版された。オリンピックは、多くの来客が押し寄せる千載一隅の金儲けのチャンスであるとし、どんな商売ができるかを紹介した図書。1936年のベルリン大会ではソーセージやビールが飛ぶように売れたことを紹介し、日本でおすすめの新商法を掲げている。サイン一手引受屋、記念スタンプ屋、移動写真屋、選手一覧表屋、ホットドッグ屋、ヤキサンドウイッチ屋など46種類の紹介がなされている。



12 オリムピック英語會話

黒田鋭吉編著, 東京: 平原社, 1941

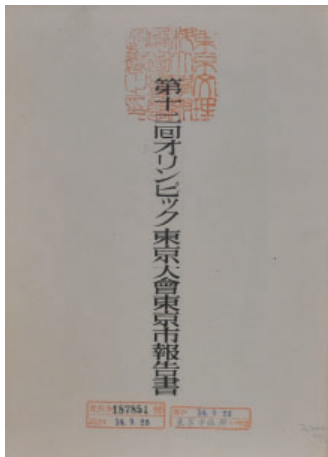
1940年の東京オリンピック開催に備えて、外国人に対して、英語で案内や日本の紹介ができるように作られた英語會話のテキスト。東京オリンピックの返上が決まって3年後の1941年に出版されている。内容は、時間と天候、食事と飲酒、鉄道やホテルでの會話のほか、スポーツと趣味についての會話が収められている。スキー、スケート、テニス、ダンス、ヨット、ボート、水泳、魚釣り、飛行機、自動車、自転車、ハイキングなど多彩に取り上げられ、それぞれの會話の例があげられている。



13 Tourist library (40冊)

Tokyo : Board of Tourist Industry, Japanese Govt. Railways, 1935-1942

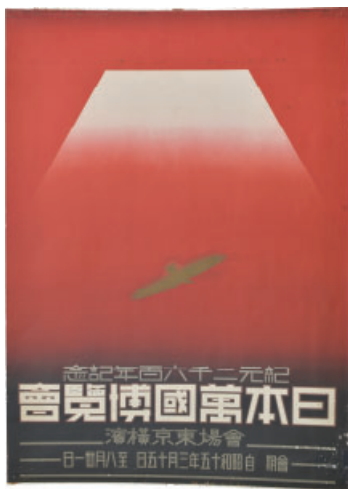
1940年の「幻のオリンピック」の招致から返上の過程と重なる1930年代、当時の鉄道省国際観光局によって発行された、日本文化を紹介する冊子一式。全40冊からなり、城や温泉などの観光のみどころや日本人の文化様式に関する様々なテーマが含まれている。相撲、踊りなどの身体文化、そして嘉納治五郎の執筆による「柔道」が紹介されている。海外の新聞雑誌や旅行者、図書館等に頒布された。



14 第十二回オリンピック東京大会東京市報告書

東京市役所編纂, 東京: 東京市, 1939

1940年に開催予定であった第12回オリンピック東京大会に関して東京市がまとめた報告書。招致・準備・返上の顛末についてまとめている。主競技場（メインスタジアム）の場所が決まらず、神宮外苑競技場の拡張工事は理解を得られず困難として、最終的に駒沢に主競技場を設置することを1938年4月7日に決定した。しかしその3ヶ月後に、大会返上を余儀なくされる。その前後の経緯についても詳細に記されている。



15 紀元二千六百年記念 日本万国博覧会

皇紀2600年（1940年）を記念して、政府が計画していた万国博覧会のために組織委員会が作成したポスターで、黄金の火の鳥が描かれている。日程は1940年3月15日～8月31日、開催地は東京（晴海、台場）と横浜を予定にして、各国への招請、前売り券の発売まで進んだが、日中戦争の勃発により、1938年に無期延期が決定され、幻の博覧会に終わった。東京の築地と月島を結ぶ勝鬃橋は、万博開催に向けて建設され、1940年に完成した。



16 オリンピック写真史大鑑

大島十九郎編輯, 東京: 明治天皇聖徳奉讃会, 1938

第12回オリンピック東京大会招致記念事業として、1938年6月15日に明治天皇奉讃会により発行されたオリンピックの写真史と解説書。序には、建国2600年、国威発揚とともに、「国際親和を計り、相互の文化交換の機と成す」べきなどと説明されている。金栗四三や織田幹雄の追想、孫選手の特集など、内容は充実している。皮肉にも発行の1ヶ月後にオリンピックの返上が決定される。

コラム

東京オリンピックと嘉納治五郎

講道館柔道を創設した嘉納治五郎は、1893年から高等師範学校校長に就任、体育の普及と教員養成制度の改革を行う。さらに中国から多くの留学生を受け入れ、スポーツを通して日本人学生との交流が盛んに行われた。そうした業績を残す中で、クーベルタンの要請に基づいて1909年に日本人初のIOC委員に就任し、1912年のオリンピック（ストックホルム）に日本選手団を率いて参加した。国境を超えたスポーツ交流の価値を十分に理解していたからであった。



1912年ストックホルム大会日本選手団入場 左端は嘉納団長

その後、日本はオリンピックへの参加を続け、1928年のアムステルダム大会で、陸上競技と水泳で金メダルを取ると、日本での開催を考えるようになる。課題はヨーロッパから日本への渡航日数で、当時は最短のシベリア鉄道を使用しても半月程かかった。しかし嘉納は、「近代オリンピックは世界に広めるために企図されたものであり、日本で開催してこそ世界の文化になる」と主張した。これが受け入れられ、1936年のIOC総会で1940年大会の開催地に東京が選ばれた。その後、日中戦争が始まる中、嘉納が1938年5月に氷川丸船上で逝去すると、政府と東京市はオリンピックを返上し、嘉納の思いは、潰えたかに見えた。しかしそれは戦後に継承されていったのである。

氷川丸に乗船し、嘉納の最期を看取った日本人が、米国の在外公館に勤務していた平沢和重。バンクーバーからの船内で、嘉納から東京オリンピックについて聞かされた平沢は、これほどの先生が言われる東京オリンピックを、成功させたいと念願した。平沢は東京高等師範学校附属中の卒業生でもあった。

戦後になり、再び日本での開催をという声が出てきた。1959年、ミュンヘンでのIOC総会において、1964年大会の開催地を決定する最終演説に選ばれたのが平沢だった。彼は、国語の教科書を取り出し、そこにオリンピックの理念や創設者クーベルタンのことが書かれていることから、日本では皆、オリンピックのことを学んでいるので、開催の準備はできている、と述べた。教育を大事にした嘉納治五郎の思いを込めたのだ。平沢は、総会の場で多くのIOC委員たちが嘉納との思い出を話しに来たことから、東京開催はすでに決まっていた、と述べている。

平沢のスピーチに合わせるように、文部省はオリンピックの学習活動を推奨した。1964年には東京都内の小中学校はもとより、多くの自治体でもオリンピックについての学習が行われた。オリンピックの平和の理念やスポーツを生涯行うことの大切さ、そしてホスト国としてのマナーやもてなしの態度について学んだのであった。さらに、東京1964大会の開催を祝して、柔道がオリンピックの正式競技に認められる。アジアで誕生したスポーツを取り入れることは、真のオリンピックの国際化を示すことになる、として決定された。

1964年10月10日、IOC会長ブランデーは開会式のスピーチで「オリンピック運動は、今や7つの海を結びつけ、オリンピックが全世界のものである証として、ついにここ東洋で行われようとしている」と述べている。彼は嘉納治五郎を尊敬し、東京での開催を支持していた人物の一人だった。東京1964大会は、嘉納治五郎の思いが継承されたオリンピックでもあった。

3. 東京オリンピック (1964) 開催まで

3.Before Tokyo 1964



1964年大会の東京開催は1959年のIOC総会で決定する。その招致演説で用いられたのが小学6年生の国語の教科書に収められた「五輪の旗」というエッセイであった。教育に訴えて東京オリンピックが決定したためか、文部省は学習読本を作成し、オリンピックの理念について児童・生徒が学ぶように手がけた。また、東京教育大学ではスポーツ研究所が設置され、スポーツの科学的研究が本格的になされていった。

The announcement of Tokyo as the 1964 host city was decided in an IOC session in 1959. The presenter spoke about an essay regarding the “five circles” in a Japanese elementary school textbook. The Ministry of Education published Olympic readers to help students understand about Olympism.

オリンピックこぼれ話

五輪の旗

オリンピックの旗に描かれた五つの輪は、五大陸を象徴している。またこのデザインはオリンピックシンボルとされ、国際オリンピック委員会 (IOC) の知的財産である。この旗のデザインが発表されたのは1914年で近代オリンピックの創設者、ピエール・ド・クーベルタンが自らデザインした。青・黄・黒・緑・赤の5色に白を加えると、ほとんどの国旗を示すことができるからであった。5つの輪は、それぞれがいずれかの大陸を表しているのではなく、5大陸がひとつにまとまったことを意味している。この旗は1920年のアントワープ大会から使用されているが、本学には、東京1964年、長野冬季1998年の五輪旗ほか、ジャック・ロゲ前IOC会長から2006年に授与された五輪旗が保有されている。

No Image.

17 小学校国語 6年下(五輪の旗)

志賀直哉ほか著、東京：学校図書、1957

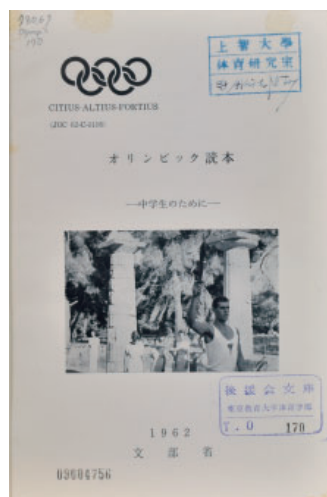
1959年、ミュンヘンで開催されたIOC総会において、東京への招致演説を行った平沢和重が使用した小学校6年生用の国語の教科書で、当時広く使われていた。この中に掲載されている「五輪の旗」のエッセイの一部を読み上げ、日本の子どもたちはオリンピックの理念や創設者クーベルタンのことをよく理解していると訴えたことで、大会招致に成功したといわれる。



18 オリンピック読本, 小学生のために

鈴木良徳ほか著, 東京: 文部省, 1964

文部省が東京オリンピック（1964年）に向けて作成した「オリンピック読本」の小学生版。全国の各教育委員会等に約50,000冊が配布された。アジアで初めてオリンピックを開催するにあたり、その歴史や意義、創始者であるピエール・ド・クーベルタン男爵の言葉が紹介され、さらに巻末にはオリンピック小辞典、オリンピック賛歌の楽譜を備えている。オリンピック学習の参考資料となったものと考えられる。



19 オリンピック読本, 中学生のために

鈴木良徳ほか著, 東京: 文部省, 1962

文部省が東京オリンピック（1964年）に向けて作成した「オリンピック読本」の中学生版で全国の各教育委員会等に約35,000冊が配布された。古代オリンピックに関する内容が含まれ、また障害を乗り越えたアスリートがオリンピックで活躍したエピソードも掲載されている。「東京大会を迎えるわたくしたちの心構え」として、公德心や環境美化の必要性も述べられている。



20 オリンピック読本, 高等学校・青年学級向け

鈴木良徳ほか著, 東京: 文部省, 1963

文部省が東京オリンピック（1964年）に向けて作成した「オリンピック読本」の高校、青年学級（就労している若者）版で全国の各教育委員会等に約28,000冊が配布された。オリンピックの歴史に関する内容とともに、東京大会の招致過程や資金計画、外国人を迎える態度、そして政府が推進する「オリンピック国民運動」への積極的な参画が呼びかけられている。



21 東京オリンピックを見るために：競技時計の見方、よみ方

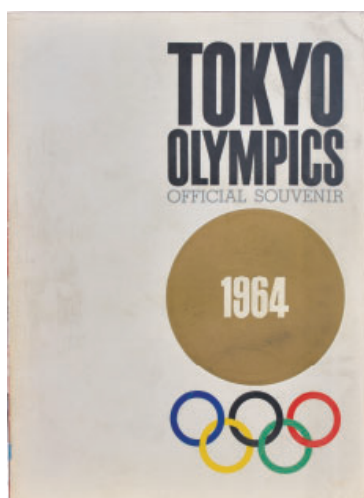
東京: SEIKO, 1964

東京オリンピックは、史上最大のオリンピック・記録のオリンピック・科学のオリンピックとも言われた。それは日本のすぐれた精密測定機器が動員されたからで、セイコーは種々の競技用時計を開発した。競技用時計の正しい見方を知る冊子として、マラソン・競歩用時計、秒大時計、バスケットボール時計など、競技別の時計が紹介されている。



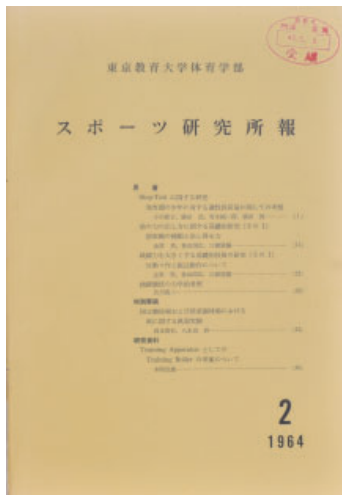
22 テレビが2倍楽しくなる！東京オリンピック・ガイド
東京：平凡出版，1964

東京オリンピックのガイドとして作成された雑誌の付録。テレビ視聴のために競技日程のほか、競技種目の解説や会場案内図、有望な日本人選手と外国人選手などが紹介されている。さらには来日した外国人との会話（簡単なあいさつ、道案内とTV観戦を一緒にする時）について、気をつけるマナーとともに英語、フランス語、ドイツ語で紹介されている。



23 Tokyo Olympics : official souvenir 1964
電通"東京オリックス"作成委員会制作，東京：電通，1964

株式会社電通がオリンピック東京大会組織委員会の監修のもと作成した公式土産としての冊子。日本の古美術に描かれたスポーツに相当する絵画の紹介や東京オリンピックの競技種目、科学と造形美を駆使した競技場や芸術展示の紹介がなされている。また、聖火リレーの国外ルートも紹介されている。公式の土産物としてゲスト観戦者に提供された。



24 スポーツ研究所報1-14号 (1961-1976)

東京：東京教育大学体育学部スポーツ研究所, 1961-1976

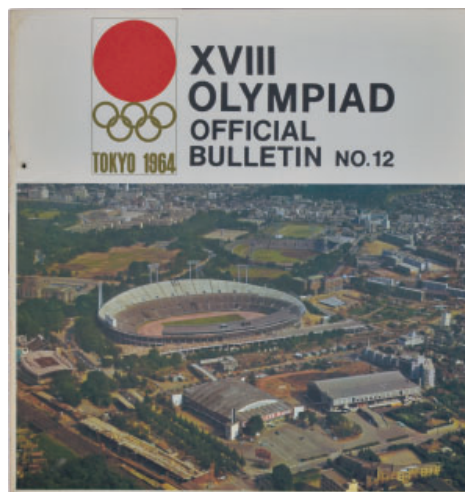
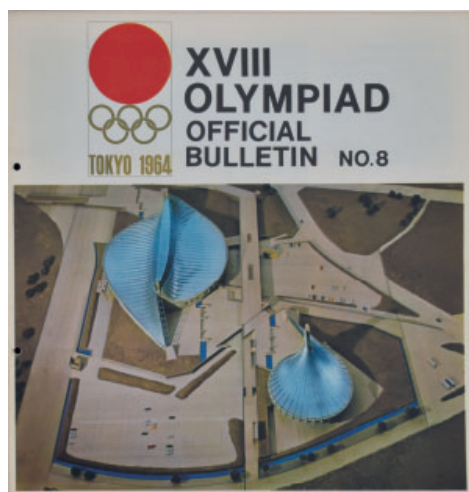
1960年に東京教育大学体育学部に設置されたスポーツ研究所の紀要で1976年まで発行された。「筋収縮の種類と出し得る力」、「跳躍競技の力学的考察」、「国立競技場および後樂園球場における風に関する風洞実験」など、競技力向上に関する研究が行われた。これらの研究は、オリンピック選手のパフォーマンスの向上を目指したもので、日本におけるスポーツ科学の発展に貢献した。



25 Tokyo Games facilities, Oct. 10-24, 1964

Tokyo : Organizing Committee for the Games of the XVIII Olympiad, 1964

オリンピック東京大会組織委員会により制作された競技施設の紹介。明治神宮オリンピックエリア（国立競技場、秩父宮ラグビー場、東京都体育館、東京都屋内水泳場、代々木国立体育館、渋谷公会堂）、駒沢運動公園エリア（競技場、体育館、ホッケー場、馬事公苑）、その他東京都内の施設、近隣県における施設の4カ所に分けて写真とともに説明されている。



26 XVIII Olympiad official bulletin

Tokyo : Organizing Committee for the Games of XVIII Olympiad, 1960-1964

1960年から1964年にかけて、オリンピック東京大会組織委員会が大会の準備状況について、IOCや諸外国向けに作成した冊子。4年間で21冊発行している。内容は、各号毎に、競技施設、競技日程、輸送計画、放送センター、日本文化の紹介などがなされている。電気時計によるタイムの計測の試験の結果や、過去の気象のデータから10月の天候状況、またスポーツ器具の輸入の手続きなども示され、外国の関係者への広報としての役割を果たした。

オリンピックこぼれ話

オリンピック・グッズ

①貯金箱コレクション

東京 1964 オリンピック競技大会では、各企業によってオリンピックに絡めた製品が生産された。中でも銀行などの金融機関は、オリンピックに関連した貯金箱や通帳が作られ、新規の預金者にプレゼントされた。この貯金箱はヒットし、貯金箱欲しさに新たに預金をする人が増えた。今回展示されている貯金箱は、鹿児島県の藤井勝己氏がコレクションとして所有されていたものである。聖火や各競技の選手を模したものが多い。貯金箱は 1972 年の札幌冬季大会でも作成された。

②オリンピック公式マスコット

オリンピック・パラリンピックは 4 年に一度開催されるスポーツの祭典であり、大会を象徴するマスコットが誕生している。最初のオリンピックのマスコットは、1968 年のゲルノーブル冬季大会で誕生した「シュス」である。日本では、1998 年の長野オリンピックで誕生した 4 匹のフクロウ「スノーレッツ」が有名である。マスコットは、開会式や閉会式はもちろん、競技中や街中でも活躍している。東京 2020 オリンピックマスコットの「ミライトワ」とパラリンピックマスコットの「ソメイティ」の活躍に期待を！

27 Tokyo 1964 Olympics Games official poster

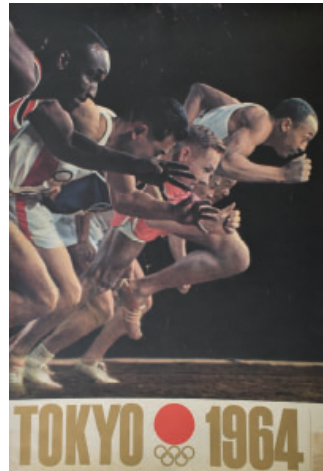
亀倉雄策デザイン, 東京オリンピック大会組織委員会発行, 1961-1964

No.1



1964年の東京オリンピック公式ポスターは、グラフィックデザイナー亀倉雄策のデザインにより全部で4種類作成された。そのうちの第1号で、東京オリンピックのシンボルマークをそのまま用いている。日の丸は聖火の「火」と太陽の「日」とを重ね合わせている。大会3年前に製作され、大会までに10万部が都道府県や公共施設などに配布された。

No.2



公式ポスター第2号。陸上短距離選手のスタートダッシュの写真が選ばれた。日本人選手3人と立川基地のアメリカ軍人3人がモデルとなり、寒い中、夜の国立競技場で撮影が行われた。第1号ポスターの1年後に製作され、大会までに9万枚が配布された。オリンピック史上初の写真を使用した公式ポスターになった。

No.3



公式ポスター第3号で、力強く泳ぐアスリートが採用された。第2号ポスターと同様にカメラによる撮影が行われ、競泳の自由形や外国人選手をモデルとして撮影もされたが、最終的にバタフライの日本人選手が選ばれた。第2号ポスターの1年後に製作され、大会までに7万枚が都道府県、公共施設等に配布された。

No.4



最後の公式ポスターとなる第4号ポスター。採用されたデザインは聖火ランナーで、間もなく大会が始まることを暗示している。撮影は冬の荒川土手で行われた。1964年の聖火リレーはギリシャからアジアを横断して日本に入り、全ての都道府県を巡ることが発表されていた。オリンピック開催年に製作され、大会の開催日が記されている。

第2部 東京オリンピック開催

Part 2 During the Tokyo Olympic Games

5年の準備期間を経て、1964年10月10日、アジアで初の開催となる第18回オリンピック競技大会が東京の国立競技場で開会された。アジア、アフリカから多くの国が初参加し、開会式ではブランデーIOC会長が東京での開催によりオリンピックは世界の文化になった、と宣言した。これは嘉納治五郎ら1940年の開催を目指した人々の念願であった。聖火の最終ランナーは1945年8月6日広島県生まれの坂井義則で平和と復興の象徴となった。選手宣誓は、「小野に鉄棒」と言われた東京教育大学出身の小野喬（日本選手主将）であった。93カ国から5,152名の選手が20競技、163種目に参加し競い合った。女子の団体種目としてバレーボールが初めてオリンピック競技になり、棒高跳びでは初めてグラスファイバーが使われた。柔道もオリンピックの正式競技になった。閉会式では選手が国別ではなく、三々五々入場し、友好の雰囲気包まれた。

大会の期間中、新聞や雑誌ではオリンピックの特集が生まれ、新聞はスポーツ紙と化し、日本国中がオリンピック一色になった。

オリンピックに引き続いて行われたパラリンピックもアジアでの初開催となり、多くの障害のある人々の競技へと拡大させた。

The 18th Olympic Games, the first edition of the Games to be hosted in Asia was held at the National Stadium in 1964. Many countries from Asia and Africa participated in the Games. The IOC president declared that the Olympics truly became an international event and an expression of world culture in Tokyo. This was the aim of Prof. Jigoro Kano for the Tokyo Games in 1940.

The last torch bearer was a youth who was born in Hiroshima on 6th August 1945. It was the first Olympic Games to include a women's team sport, volley ball and an Asian sport, Judo. The Paralympic Games also held in Tokyo, was hosted in Asia for the first time.

オリンピックこぼれ話

東京オリンピック競技種目

東京 1964 オリンピック競技大会の 20 競技（陸上競技、水泳、水球、体操、柔道、レスリング、自転車競技、バレーボール、バスケットボール、サッカー、ボクシング、ボート、ヨット、カヌー、フェンシング、ウエイトリフティング、ホッケー、近代五種競技、馬術、射撃）の 163 種目で、前回のローマ大会より、柔道とバレーボールの 2 競技が増えた。女子バレーボールは、オリンピック史上、初の女子の団体競技であった。「東洋の魔女」と言われた日本女子は、優勝に輝いた。柔道は日本発祥のスポーツであることから、オリンピックを国際的な文化にする象徴として取り入れられた。4 階級のうち、軽量級、中量級、重量級は日本が優勝したが、無差別級ではオランダのヘーシンクが優勝した。

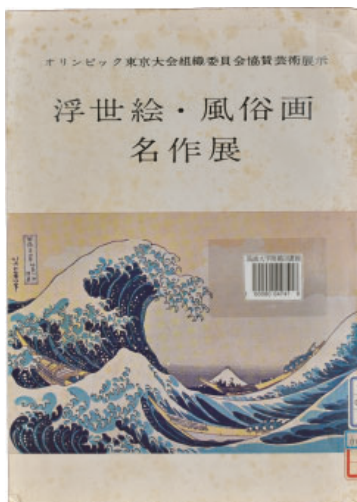
1. 芸術展示

1. Artistic Exhibition



オリンピックはスポーツの祭典であるとともに、芸術・文化の祭典でもある。当時のオリンピック憲章には、開催国で芸術展示を行うことが定められており、それに基づいて東京大会でも芸術展示が行われた。浮世絵や風俗画、古美術、写真、スポーツ切手などの展示が行われ、日本文化を紹介する場になった。展示のほか、日本の古武道、薙刀なども紹介され、また歌舞伎座での歌舞伎の上演は、外国からの観光客に好評を博したのであった。

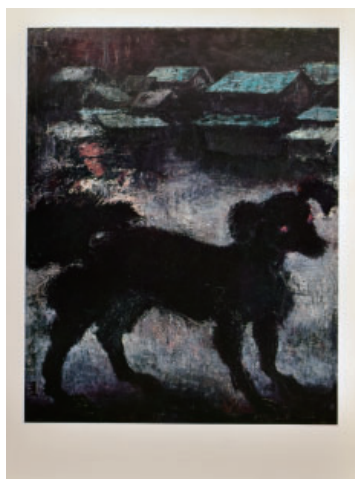
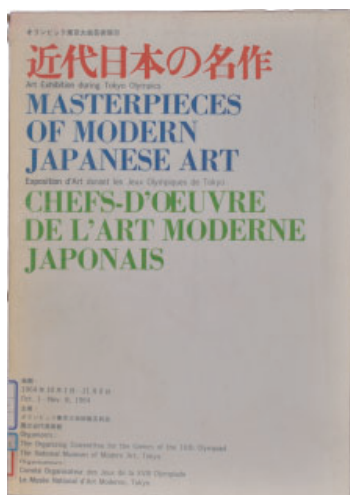
The Olympic Charter at that time indicated that the host country should have an artistic exhibition during the Games. The Tokyo Organizing Committee curated an exhibition of Ukiyoe, traditional arts, photos and sport stamps. In addition, traditional martial arts and Naginata and Kabuki were performed in theaters.



28 浮世絵・風俗画名作展

東京：日本浮世絵協会，日本経済新聞社，1964

1964年当時のオリンピック競技大会では、開催国で、芸術展示が行われることがオリンピック憲章で定められていた。これに則り、東京においてオリンピックの芸術展示の一つとして企画されたのが「浮世絵・風俗画名作展」である。1964年10月9日から21日まで、日本橋白木屋にて陳列された312点を収録した図録である。それらのうち105点は欧米諸国から出品されたもので、浮世絵の里帰りという意味も持っていた。



29 近代日本の名作：オリンピック東京大会芸術展示

東京：国立近代美術館, 1964

オリンピック東京大会芸術展示として国立近代美術館にて、1964年10月1日から11月8日まで展示された「近代日本の名作」の図録。日本の近代芸術は、東洋美術の長い伝統を背景にしながら、19世紀後半以降、西洋美術の合理的な技法を取り入れ、独自の芸術を作りあげたことを紹介している。



30 Art exhibition in Tokyo Olympic Games : sports philately

東京：オリンピック東京大会組織委員会, 1964

オリンピック東京大会芸術展示として開催されたスポーツ郵便切手展（スポーツ・フィラテリー）の目録。1964年10月1日から21日まで大手町の通信総合博物館で、スポーツに関連する切手が展示された。通常切手、国立公園や国定公園のほか、オリンピックの記念郵便切手、オリンピック東京大会にちなむ寄付金つき郵便切手などが展示された。



31 日本・カラー 1964
 : オリンピック東京大会芸術展示写真展作品集
 オリンピック東京大会組織委員会編
 東京: 平凡社, 1964

オリンピック東京大会芸術展示の美術部門に属す写真展の作品集。1960年のローマ大会に次いで2番目の展示になる。56名の新進気鋭の日本人写真家による作品が全てカラーで展示された。しかもこれらのカラー作品に使用された感光材料が全て国産のもので、写真芸術における日本の技術の進歩という点からも画期的な展示となった。



32 日本古美術展
 東京: 東京国立博物館, 1964

オリンピック東京大会芸術展示として東京国立博物館で開催された日本古美術展の図録。国宝154点、重要文化財254点を含む870点の作品が展示された。縄文時代の土偶、古墳時代の埴輪武装男子(重要文化財)、平安時代の普賢菩薩像(国宝)、鎌倉時代の制多伽矜羯羅童子立像(国宝)、江戸時代の舟橋蒔絵硯箱(重要文化財)などが含まれ、時代も多岐にわたっている。



33 オリンピック東京大会芸術展示 十月大歌舞伎

松竹株式会社演劇部編，東京：松竹株式会社事業部，1953

オリンピック東京大会芸術展示として行われた歌舞伎公演の冊子。歌舞伎座による十月公演が芸術展示として行われることになった。最高の芸術を上演したいというはからいで、歌舞伎の格式、重量感、作品の価値などで代表的な作品として選ばれたのは、「道成寺」、「鏡獅子」、「助六」、「野崎村」、「寺子屋」であった。また海外公演で好評を博した歌舞伎十八番の「鳴神」も上演された。

オリンピックこぼれ話

オリンピックと芸術

クーベルタンは、スポーツと芸術の両方の競技を考えた。心身ともに調和のとれた若者を育成するというオリンピズムの理念に基づいていた。ストックホルム1912年大会から、建築、彫刻、絵画、文学、音楽の5分野で芸術競技が実施され、メダルが授与された。その後、ロンドン1948年大会まで正式競技として実施されている。しかし評価の難しさや運搬の問題などで、戦後は開催国の芸術作品が鑑賞される「芸術展示」になった。バルセロナ1992年大会よりは、「文化プログラム」に変わり、より広範囲な文化・芸術の展示やパフォーマンスの交流などが行われるようになった。

2. 市民文化としてのオリンピック

2. The Olympics as Popular Culture



東京オリンピックは、新聞ではもちろん、少年雑誌や女性雑誌でも特集が組まれた。それぞれ工夫を凝らし、児童・少年が興味を持ちやすいように有名なアスリートのエピソードや大会の見どころを紹介している。女性雑誌でも外国人選手の「ベストドレッサー」を発表するなど、女性の視点で特集が組まれた。さらに当時の著名な文学者たちが、オリンピックを見て何を思い、感じたかを綴る特集もいくつかの新聞で組まれた。併せて、オリンピック後に開催されるパラリンピックについても紹介された。

また文房具店では、オリンピックかるた、聖火を模した定規、オリンピックマークの入った筆箱や鉛筆、駄菓子屋では、オリンピック選手の日光写真、オリンピックめんこなど、オリンピック関連のグッズにあふれていた。

Magazines for boys and girls were featured during the Olympics. Stories of the Olympic athletes and highlights of the Games were introduced in these magazines. Women's magazines posted views on matters of interest, such as the best dressed foreign athletes and visitors.

Stationery stores were filled with Olympic-related goods such as Olympic Karuta, imitation Olympic torch, rulers and pencils and pencil cases with the Olympic logo.



34 東京オリンピック：文学者の見た世紀の祭典 東京：講談社, 1964

作家や文化人が、東京オリンピックの期間中、大会を見てどのように感じたかなどの寄稿をまとめたもので、1964年12月に講談社より発行された。石原愼太郎、三島由紀夫、大江健三郎、曾野綾子、井上靖、杉本苑子なども多数寄稿している。彼らは日本で初めて開催されたオリンピック競技大会について、戦争や国家との関係、そして外国人と日本人のスポーツに対する姿勢の違いなどについて細やかに記している。



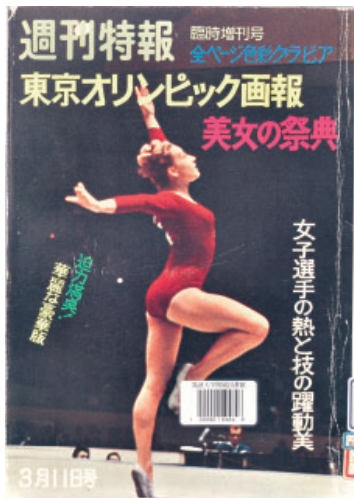
35 週刊少年サンデー, 6巻43号 (10月18日号)
東京: 小学館, 1964

週刊少年サンデーは小学館発行の週刊漫画で、おそ松くんやオバケのQ太郎などが連載されていた。1964年10月18日号は、オリンピック特集として開会式に国立競技場の上空で五輪を描く特別飛行隊、ブルーインパルスBlue Impulseの訓練の様子が物語として紹介されている。また選手村の内側の様子、さらには砲丸投げ、十種競技の選手などが怪力選手として取り上げられている。



36 週刊少年サンデー, 6巻44号 (10月25日号)
東京: 小学館, 1964

1964年10月25日号は、オリンピック特集としてマラソン競技を取り上げ、君原選手の物語や、日本選手のライバルとして1960年のローマオリンピックで裸足で走って優勝したアベベ選手（エチオピア）やイギリスのヒートリー選手などが紹介されている。さらにはこれまでの変わりダネの選手として、途中で車に乗ってコースを移動したインチキ・マラソンなどの話も掲載されている。



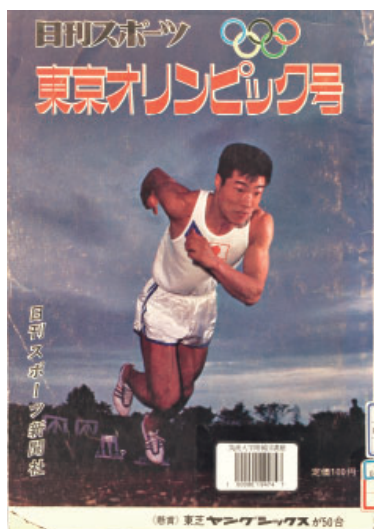
37 週刊特報 東京オリンピック画報・美女の祭典 (3月11日臨時増刊号)
東京：新樹書房, 1965

ミス東京と言われた体操のチャスラフスカ (チェコスロヴァキア)、ラチニナ (ソ連)、そして小野清子 (日本、東京教育大学卒) など、女性選手の演技を特集した写真集。バレーボールら陸上競技のシーンのほか、選手村で男女の選手が肩を組んで歩いたり、国籍に関係なく一緒に自転車を乗り回したり、常に陽気な南米の選手たちの様子なども紹介されている。

オリンピックこぼれ話

パラリンピック東京 1964

パラリンピックは、国際パラリンピック委員会が主催する障害者スポーツ大会だが、この名称が決められたのは 1988 年であった。それ以前は国際身体障害者スポーツ大会の名称が主に使われていたが、東京 1964 では、パラリンピックが愛称として使用された。それまでは、車いすを使用する人々のみの競技であったが、東京大会では、国内競技として視覚や聴覚など様々な障害のある人々に門戸を開いて行われ、9 競技 (アーチェリー、陸上競技、車椅子バスケットボール、車椅子フェンシング、水泳、卓球、パワーリフティング、スヌーカー、ダーチェリー) に、21 か国から 378 名の選手が参加している。この翌年、日本身体障害者スポーツ協会 (今日の日本障がい者スポーツ協会) が設立された。



38 日刊スポーツ
東京オリンピック号 (1964年9月号)
東京：日刊スポーツ新聞社, 1964

大会直前に発行された日刊スポーツの特集号。表紙には100mで10秒1の記録を持つ飯島秀雄（水戸市出身）の疾走シーンが飾られている。君原健二、寺沢徹、円谷幸吉などのマラソン選手、80メートル障害の依田郁子、水泳の田中聡子、木原美智子、山中毅など、メダルの期待のかかる選手たちの練習風景が紹介されている。現在、飯島氏は水戸市でスポーツ店を経営している。



39 女性セブン (1964年10月21日号)
東京：小学館, 1964

女性セブンや女性自身などの女性週刊誌でも、東京オリンピックは話題になった。オリンピックに来日した「外人ベストドレッサー」を紹介したり、女性選手の紹介、果ては「選手村の夜の生活」などの特集が組まれた。また、「忘れられたもう一つの五輪」として、パラリンピックに挑む選手たちの紹介もなされた。こうした記事は多くの女性がスポーツに関心を持つきっかけになった。



40 Paralympic Tokyo 1964 : International Stoke Mandeville Games ;
 パラリンピック : 国際身体障害者スポーツ大会
 東京 : 国際身体障害者スポーツ大会運営委員会 , 1964

1964年の東京オリンピック終了後に、11月8日から14日まで東京で行われたパラリンピックについてのパンフレット。正式名称は「国際身体障害者スポーツ大会」だが、愛称として「パラリンピック」と名付けた。第1部は車イス選手による国際競技が行われた。第2部は国内大会とし、肢体不自由者、視覚障害者、聴覚障害者など様々な障害のある人々の競技を行ったことが記されている。

第3部 東京オリンピック開催後

Part 3. After the Tokyo Olympic Games

5年間の準備の末、15日間の東京オリンピックは瞬く間に終わった。日本人選手も大活躍し、大会報告書や各社の写真集などは興奮冷めやまない状況が続き、成功したことを書き立てた。観戦した小・中・高校生の感想文を収録した書籍も出版され、それらを読むと彼らの率直な感想が寄せられている。多くは選手たちの一生懸命な姿や健闘をたたえ合う姿に感動した様子が綴られているが、陸上競技の予選を観戦した児童からは、どこで何が行われているのかがわからないので、ルールを同時に解説してもらいたい、などの声が少なからずあった。また外国のメディアでは、日本人の集団的、統一的な行動を批判するものもあった。そうした声も収録しているのは、日本人自身が外国からどのように見られているのかを気にしていた様子がうかがえる。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まると、両者の大会を比較する書籍が登場する。1964年の東京オリンピックは、新幹線に象徴されるように、日本のテクノロジーと高度経済成長の中で行われたバラ色時代のオリンピックであった。対して2020年は多様性を認め合う、自己ベストなど、日本人の内面の開発に向けられている。

Many media celebrated the success of the Games. According to children's commentary books, children were impressed by the international exchange and exhibitions of fair play. Some children indicated that they could not understand what happened in the track and field stadium. They suggested that someone should have explained the rules in detail. Some foreign media criticized the collective and unified behavior of Japanese society. In contrast some Japanese were sensitive to the reaction of foreigners.

When the bid for Tokyo 2020 was successful in 2013, some books reported comparisons with Tokyo 1964, including differences and the continuity of vision. Tokyo 1964 was the product of strong economic development, and Tokyo 2020 represents the holding of the Games in a stable era whilst considering the need for diversity in the future.



41 世界を結ぶ東京オリンピック, 小学校篇

第18回オリンピック東京大会組織委員会団体入場連絡競技会編
東京：清水書房, 1966

東京オリンピックは、沖縄を含む全国都道府県の小・中・高等学校の児童・生徒、約60万人が見学した。本資料は、世紀の祭典を見学した彼らから各都道府県の教育委員会を通じて1600点の感想を収録したもの。フェアプレーや国を超えて称え合う選手たちの姿に感動を覚えたとの感想がある一方、ルールがわかりにくかったなどの感想も見られる。オリンピックが児童・生徒に何を残したかを知るための貴重な資料である。



42 別冊 キネマ旬報 東京オリンピック

東京：キネマ旬報社, 1965

市川崑監督が監修した東京オリンピックの公式記録映画についての写真と舞台裏の話をまとめたもの。撮影のためにカメラ100台を集め、561名のスタッフが動いていたこと、70時間の映像を3時間に縮めた苦労などを、監督自身が明かしている。この記録映画は、選手の競技前の緊張した様子や、大会役員たちが懸命に働いている姿が描かれ、IOCから高い評価を受けた。

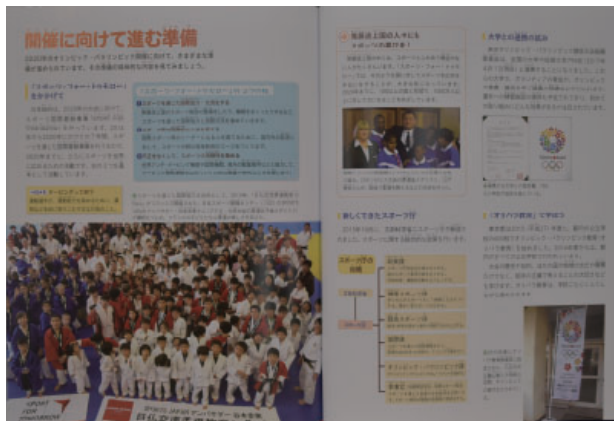


43 2つの東京オリンピック

1964/2020

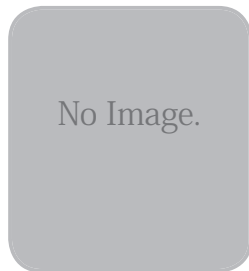
日本オリンピック・アカデミー監修
東京：小峰書店, 2016

1964年東京オリンピック、アジアで行われたオリンピック（1972年札幌、1988年ソウル、1998年長野、2008年北京）そして2020年の東京大会への準備について掲載している。日本はこれまでの大会を経て、世界への貢献として、スポーツの価値を世界に広めるためのプロジェクトで筑波大学が深く関わっている「スポーツ・フォー・トゥモロー」も紹介されている。



44 大成功の東京オリンピック

東京：電通：共同通信社, 1964



共同通信社が発行した写真グラフ。活躍した日本の女子バレーボール、体操、マラソンのほか、外国選手のエピソード、さらに健闘むなしく敗れた選手をグッドルーザーとして称えている。また、人間の描き出す美の表現として、体操で得た日本男子の5つの金メダルでは、東京教育大学出身の遠藤幸雄、小野喬、三栗崇選手が紹介されている。



45 美と力

東京：読売新聞社, 1964

東京オリンピックについて読売新聞で掲載した写真集。競技の様々だけではなく、アジア各国を回った聖火リレーの写真も掲載されている。また、開催都市トウキョウを新幹線、高速道路、モノレール、西洋式ホテル、そして大会の競技場が日本の科学と技術力で完成されていった様子を紹介している。さらに、腕を組んで自由に選手たちが入場した閉会式の様子も記録している。



46 第18回オリンピック競技大会東京都報告書

東京：東京都, 1965

東京都がオリンピックを招致してから、大会の準備、大会時の役割、大会終了後の処理などについて克明に記録したもので1965年2月末にまとめられた。国際オリンピック委員会ははじめ、内外ともに高い評価を得たが、フランスやイタリアのメディアでは行き過ぎた機械化、国粋主義的、通訳が不十分などと評されていたことが記されている。



47 東京オリンピックと新幹線

東京都江戸東京博物館, 行吉正一, 米山淳一編著

東京：青幻舎, 2014

1964年の東京オリンピックの開催と関連づけられるのが東海道新幹線の開業。世界最速を記録し、安全に配慮した日本のテクノロジーの高さを示した。戦後から高度経済成長期にかけての市民生活の変化は新幹線の開業と世界に日本のテクノロジーと文化を発信したオリンピックに象徴される。1964年のオリンピックとパラリンピックは、人々の生活を見る上でも歴史の転換点として紹介されている。

2019年のNHK大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺～」では、日本初のオリンピック選手、金栗四三の物語が描かれている。本特別展の企画を務めた真田（体育系教授）、大林（同助教）の両名は、そのドラマの時代考証（スポーツ史）を担当し、その作業では本書で紹介した各資料も様々に活用された。そこで、このコラムでは、東京高等師範学校の徒歩部（現・筑波大学陸上競技部）で鍛錬を積み、明治45（1912）年ストックホルム大会のマラソン競技に出場、その後も日本長距離界の先駆けとして活躍した金栗が、体格に劣る日本人が西洋列強の選手に対抗するためにどのような努力をしていたかという観点から、その「いだてん」流マラソン必勝法について紹介する。（参考資料：金栗四三・明石和衛（1916）『ランニング』菊屋出版部。）



1914年東京高等師範学校
卒業アルバムより

1、ランニングフォーム

金栗は、マラソンにおける理想的なランニングフォームについて、次のように説明している。

走る時は…拳は鶏卵を握った心持で握ればよい。両手は胸の辺りまで曲げず、肘を中心としてなるべくならば前腕部を任意に前後にふりて、両肩は動かさない心地で居る。両足は平行に踏みつけねばならぬ。我々日本人は、平常坐する時、アグラをかくから膝の辺が外側に曲り、足のさきも外の方に向いて居る人が多い。同じ一步に就いても二三分の差が出来る。一步では僅かに三分でも数万歩となると、其の距離は大なるのである。（一部抜粋、省略）

つまり、一人で走る時は6～7m程度前方、また集団で走る時は前の人の腰辺りを見て、肩を動かさず前腕を前後に振り、手は「鶏卵を握った心持」でいることを勧めている。また、1歩では1cmに満たない差でも、長距離を走る上では大きな影響が出ることが説かれている。100年以上も前に、すでに日本人の生活様式に起因する膝のアライメントの問題や、近年話題となった「ミッドフット走法」に関する接地法、さらにはピッチとストライドの関係性にまで言及されていたことは、特筆すべきことであろう。そして、フォームとともに重要とされていたのが、ランニング中の呼吸法である。

2、呼吸法

大河ドラマでは「すっすっ、はっはっ」という息遣いが金栗のいわば代名詞となっているが、金栗自身はその呼吸法について、次のように説明している。

手と足と呼吸は連絡して程よく調和をとる様にせねばならん。三者中其の何れかが乱れると早や駄目になってくる。呼吸は平生では、スーと吸い込み、またスーと出すが走る時は、はき出すにも、吸い込むにも二つに切るので、是を側から聞いて居ると吸ふ時、スー、スーと音がし又出す時も同様である。…一呼吸が四ツに分れ、それにつれて手も足も四度運動するのである。（一部抜粋、省略）

ここでは、呼吸のリズムと四肢の連動について説明されている。金栗はこのフォームと呼吸法をもとに鍛錬を積み、富士山麓での不整地走や千葉県館山の砂浜における耐熱練習、さらには電信柱を目印とするインターバル・トレーニングなど、画期的な練習法を編み出した。

3、食事

アスリートとして生活の全てをマラソンに捧げていた彼は、どのような努力を重ねていたのだろうか。

金栗は、最も重要なポイントとして規則正しい食生活を挙げている。前提として、まず虫歯の治

療と胃腸の鍛錬（1～2週間に1度は腹十二分に飲食して消化器を鍛える）を行った上で、次のような食事を勧めている。

牛、魚、鶏、豚類で之れ等は滋養もあり値と云っても相応しているから食って大によい、割合にうまいのはスキ焼か或は此等の肉を煮て食ふのである、油あげ類は、経験上あとに残る様で気が悪い様であるから、餘り奨励はせない、肉類の外に卵あり、豆腐あり、共に食ってよい、新鮮な野菜を食へば元気がついてくる。

日本では古来味噌汁が出る、之は豆から造られた滋養分もあると云ふことで吸ふても結構であるが、競走などの前には、少し減じた方がよい様だ、経験によると此は、二三時間の後迄も、走って居る途中に、口に出てくることがある。（一部抜粋、省略）

動物性、植物性のタンパク質と野菜をバランスよく摂取する、ということだろうか。思わぬところで「いだてん」のすき焼好きが判明したが、ここでは他にも、牛乳はランニングの練習時の水分補給に適さないこと、また暑い時期に氷水をガブガブ飲むのは胃腸の機能を低下させてしまうことなどが述べられている。

4、睡眠

金栗は次に、練習後の休息の大切さを説いている。中でも最も重要な点として7時間以上の睡眠を挙げているが、ここで特筆すべきは金栗流の「布団に入ってから心掛け」である。

一日の自己の爲した行動を顧みて善悪を反省するのは大切であるが、それ以外所謂空想や、雑念に耽ってはならぬ、就床後は直ちに無我の境に入る様にし、若し直ちに眠られぬ人でもつとめて早く眠る様に習慣を付けねばならぬ。

扨て朝になって目覚めてから布団の中で雑念に耽って、いつ迄も起き出でずもぢもぢして居るのは最悪、一度目を覚したならば、少し早くとも勇らしく起き出でた方がよい、冬などは殊により気持ちで目覚め乍ら布団の内の空想は、よくやるものであるが最新鮮な頭脳を雑念に耽らすのは、精力経済上最忌むべきではないか。（一部抜粋、省略）

寝る前にあれこれ考えることは良くない、また、朝は「もぢもぢ」せずに布団から出るべきである。ちなみに、東京高等師範学校の寄宿舎では消灯が午後10時、起床が午前5時半（冬季は6時）と厳格なルールが設定されていた。

5、冷水浴

さて、起床後は冷水浴。ドラマでは「ひゃああーっ！」と声をあげて水をかぶるシーンが何度も描かれているが、金栗はその作法について次のように説明している。

冷水浴は、主に朝起きてからやるが、其の方法は冷水を急に頭からカブルよりもカブル前に、手でよいから頭から全身を一寸摩擦して次に冷水を頭からカブルのである、次に一二分間瞑目して、無我の境に入り、それから又手で全身を擦り、次に干ける手拭で、十分全身を摩擦し之が終ってから全身の体操を数分間やるのである。之が済んでから衣服を着る。（一部抜粋、省略）

金栗はこの冷水浴の効果「皮膚を強壯にし、血液循環をよくし、筋肉の伸縮力を増す」と述べている。一方で「若し不幸にして風邪に侵されたならば、暫時冷水浴を中止した方が安全である」と、補足が付されていたのも印象的である。

以上の通り、日本初のオリンピック選手、「いだてん」金栗四三のマラソン必勝法を紹介した。明治45（1912）年のストックホルム大会での雪辱を期し、様々な試行錯誤と努力の末に編み出されたその理論は、その後の日本における長距離界の発展を支えるとともに、現在のスポーツ科学にも脈々と受け継がれている。

近現代オリンピック（夏季大会）年表

回	年	開催地（国）	特記事項
	1894		クーベルタンがパリ大学でオリンピック復興演説
1	1896	アテネ（ギリシャ）	ピエール・ド・クーベルタンがIOC会長に就任 世界初のマラソン（マラトンからアテネまで）
2	1900	パリ（フランス）	万国博覧会付属競技会として開催。女子選手の初参加（22名）
3	1904	セントルイス（アメリカ）	キセル・マラソン事件が発覚
	1906	アテネ（ギリシャ）	特別大会（中間オリンピック）
4	1908	ロンドン（イギリス）	選手は個人参加ではなく国ごとの参加になる
	1909		嘉納治五郎アジア初のIOC委員になる
	1911		大日本体育協会設立
5	1912	ストックホルム（スウェーデン）	日本初参加。団長は嘉納治五郎 選手は三島弥彦と金栗四三の2名
6	1916	ベルリン（ドイツ）-中止	第1次世界大戦のため中止
7	1920	アントワープ（ベルギー）	戦争の傷跡深いベルギーが開催地になる。国際連盟の成立 テニスで日本初のメダルを獲得（銀）
	1923		関東大震災
8	1924	パリ（フランス）	パリ2度目の開催 マラソンの距離が、正式に42.195kmに定められる
9	1928	アムステルダム（オランダ）	日本人初の金メダリスト誕生 人見絹枝が日本人女性初のオリンピック出場、銀メダル
10	1932	ロサンゼルス（アメリカ）	陸上競技で初めて写真判定装置が導入される
11	1936	ベルリン（ドイツ）	史上初の聖火リレー 前畑秀子（競泳）の活躍に「前畑がんばれ」の実況
	1939		第2次世界大戦がはじまる～1945年終結
12	1940	東京（日本）-返上 ヘルシンキ（フィンランド）-中止	東京が開催を返上し、ヘルシンキになるが第2次世界大戦のため中止
13	1944	ロンドン（イギリス）-中止	
	1946		大日本体育協会により日本オリンピック委員会が設立される
14	1948	ロンドン（イギリス）	戦争責任を問われ日本とドイツは招待されず
15	1952	ヘルシンキ（フィンランド）	ソビエト連邦が初参加
16	1956	メルボルン（オーストラリア） ストックホルム（スウェーデン）	初の南半球での開催 馬術のみストックホルムで開催
17	1960	ローマ（イタリア）	体操男子団体が日本初優勝。第1回パラリンピックが開催
18	1964	東京（日本）	アジア初のオリンピック 正式競技になったバレーボールで日本女子チームが金メダル
19	1968	メキシコシティ（メキシコ）	最終聖火ランナーに史上初の女性が起用される 日本サッカー銅メダル
20	1972	ミュンヘン（西ドイツ）	ゲリラによるテロ事件発生。男子バレーボール金メダル
21	1976	モントリオール（カナダ）	国際政治問題の続発で参加国数が激減 日本は体操男子団体が史上初の5連覇達成
22	1980	モスクワ（ソ連）	西側諸国が大会をボイコット。日本も不参加
23	1984	ロサンゼルス（アメリカ）	東側諸国が大会をボイコット
24	1988	ソウル（韓国）	ドーピングの発覚による金メダル剥奪が話題になる
25	1992	バルセロナ（スペイン）	東西冷戦の終結により最大規模の大会になる 柔道女子が正式種目となる。
26	1996	アトランタ（アメリカ）	カール・ルイスがオリンピック四連覇の偉業
27	2000	シドニー（オーストラリア）	2度目の南半球・オーストラリアでの開催 高橋尚子がマラソンで日本の女子陸上競技として初の金メダル
	2001		アメリカで同時多発テロが発生
28	2004	アテネ（ギリシャ）	第1回以来108年ぶりのアテネ開催 野村忠宏が前人未到の柔道での3大会連続金メダル
29	2008	北京（中国）	中国で初の開催 日本陸上トラック競技初の男子400mリレーで銅メダル
30	2012	ロンドン（イギリス）	オリンピック史上初の三度目となるロンドン開催 競技から野球とソフトボールが除外される
31	2016	リオデジャネイロ（ブラジル）	難民選手団が結成され参加する 伊調馨がレスリングで女子個人として人類史上初の4連覇（金）
32	2020	東京（日本）	男女混合種目が増加する
33	2024	パリ（フランス）	
34	2028	ロサンゼルス（アメリカ）	

掲載資料一覧

番号	資料名	請求記号
1	Tokyo : sports center of the Orient	780.69-To46
2	日本	210.7-N77
3	TOKYO	780.69-To46
4	1964 to TOKYO	780.69-To46
5	東京オリンピック招致委員会（2012）立候補ファイル	個人蔵
6	オリンピック・パラリンピック学習読本, 小学校編	780.69-To46
7	オリンピック・パラリンピック学習読本, 中学校編	780.69-To46
8	オリンピック・パラリンピック学習読本, 高等学校編	780.69-To46
9	運動競技資料とオリムピック事情	ス 600-71
10	オリムピックの書	780.69-D25
11	東京オリムピック大会を目指す金儲け	780.69-U92
12	オリムピック英語会話	780.69-Ku72
13	Tourist library (40 冊)	789.2-Ka58 ほか
14	第十二回オリンピック東京大会東京市報告書	ス 600-77
15	紀元二千六百年記念 日本万国博覧会	727.6-Ki16
16	オリンピック写真史大鑑	780.69-O77
17	小学校国語 6 年下 (五輪の旗)	へ 100-586
18	オリンピック読本, 小学生のために	780.69-Olympic-165
19	オリンピック読本, 中学生のために	780.69-Olympic-170
20	オリンピック読本, 高等学校・青年学級向け	780.69-Olympic-164
21	東京オリンピックを見るために: 競技時計の見方、よみ方	780.69-Olympic-144
22	テレビが 2 倍楽しくなる! 東京オリンピック・ガイド	780.69-Olympic-162
23	Tokyo Olympics : official souvenir 1964	780.69-Olympic-62
24	スポーツ研究所報 1-14 号 (1961-1976)	本学紀要雑誌
25	Tokyo Games facilities, Oct. 10-24, 1964	780.69-Olympic-138
26	XVIII Olympiad official bulletin	780.69-Olympic-229 ほか
27	Tokyo 1964 Olympic Games official poster	780.69-To46
28	浮世絵・風俗画名作展	780.69-Olympic-130
29	近代日本の名作: オリンピック東京大会芸術展示	780.69-Olympic-126
30	Art exhibition in Tokyo Olympic Games : sports philately	780.69-Olympic-142
31	日本・カラー 1964: オリンピック東京大会芸術展示写真展作品集	780.69-Olympic-86
32	日本古美術展	780.69-Olympic-53
33	オリンピック東京大会芸術展示 十月大歌舞伎	780.69-Olympic-67
34	東京オリンピック: 文学者の見た世紀の祭典	780.69-Olympic-72
35	週刊少年サンデー, 6 巻 43 号 (10 月 18 日号)	780.69-Olympic-121
36	週刊少年サンデー, 6 巻 44 号 (10 月 25 日号)	780.69-Olympic-122
37	週刊特報 東京オリンピック画報・美女の祭典 (3 月 11 日臨時増刊号)	780.69-Olympic-59
38	日刊スポーツ 東京オリンピック号 (1964 年 9 月号)	780.69-Olympic-104
39	女性セブン (1964 年 10 月 21 日号)	780.69-Olympic-21
40	Paralympic Tokyo 1964 : International Stoke Mandeville Games ; パラリンピック: 国際身体障害者スポーツ大会	780.69-Olympic-300
41	世界を結ぶ東京オリンピック, 小学校篇	780.69-Se22
42	別冊 キネマ旬報 東京オリンピック	780.69-Olympic-84
43	2 つの東京オリンピック 1964/2020	780.69-O71-1
44	大成功の東京オリンピック	780.69-Olympic-227
45	美と力	780.69-Olympic-91
46	第 18 回オリンピック競技大会東京都報告書	780.69-T
47	東京オリンピックと新幹線	780.69-To46

※請求記号「780.69-Olympic」は 1964 年に開催された東京オリンピックを記念し、旧東京教育大学体育学部で収集されたコレクション（体育・芸術図書館所蔵）。

企画

筑波大学体育系

西保 岳 (系長)

真田 久 (教授)

大林 太朗 (助教)

山口 拓 (助教)

筑波大学附属図書館

阿部 豊 (館長)

呑海 沙織 (副館長・研究開発室長)

鈴木 秀樹 (学術情報部長)

筑波大学附属図書館研究開発室

谷口 孝介 (人文社会系教授)

山澤 学 (人文社会系准教授)

附属図書館特別展ワーキング・グループ

大久保 明美 (主査)

渡辺 雅子

真中 篤子

福井 恵

渡邊 朋子

藤田 祥子

高橋 雅一

岡田 信子

塩澤 美咲

講演会

令和元年11月10日 (日) 13:30 ~ 15:30

令和元年11月27日 (水) 13:30 ~ 15:30

講演者 真田 久 (体育系教授)

電子展示Web

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2019/>

令和元年度筑波大学附属図書館特別展

～東京1964 と日本文化について考える～

令和元年11月1日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2019

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

ISBN 978-4-924843-97-4